算命学 中国占星術 第五巻

☆二十八元法の原理☆

荘学院算命学人体図は最低8個の星算出によって構成されているが、みなさん方はすでに5個の星算出が可能になったはずである。

十大主星は宇宙における空間から生まれ、十二大従星は時間から生まれた星であった（第三巻、第四巻参照）。

人体図の頭部と腹部は空間からの星、両足部と左肩部は時間によって生まれた星である。

第五巻においては心臓部（中心部）と両腕部の3個を表出する技法部分についてであるが、この3個の星を表出する技術を二十八元法というのである。

二十八元法は空間分類の一種なのであるが、太陰（月）の運行法則が算出の起因になっている。木星（歳星）の運行法則によって黄道十二星座が出来上ったように、太陰の運行法則においても二十八宿星座なるものが天空上に作り出されたのである。十二兄弟（えと）を理解する為に木星の12年周期を知らなければならなかったように、この二十八元法を理解する上には黄道二十八宿星座を知る必要が生じるのである。

黄道二十八宿星座とは太陰（月）が毎夜その姿を変化させつつ、天を一周する日数が二十九日余りになる処から作り出されたものである。

月は一日として同じ姿を見せる事はない。月に限らず宇宙は全て止る事なく常に動いているのである。太陰の正確な一朔望日数は29.5305882日であるが、その姿も新月（朔）上弦、満月（望）下弦、暗（晦）と変り、7日間ごとの観察によってさらに変化をはっきりと見る事が出来る（第二巻暦術の項参照）。

太陰（月）は太陽や五惑星と同じように天上にあって黄道上を運行する。その為に太陰の運行法則に従い天空を28ケ所に区分けしたのである。

ここでみなさん方が不思議に感じられる処が、二ケ所程出て来るはずである。その一つは一朔望月が29.530……なのに対し天空の区分は28区分になっている事である。

この不思議さは現代の天文学では理解出来にくい部分であり算命学を形成した当時の人達の智恵と思索を知る必要が生じて来るのである。

天文学者の中にも赤道を区分したのであろうと推測したり、黄道を区分したのではなかろうかと推論する人等がいて、古代のベールは未だに除かれてはいない。

さらに二十八宿星座は黄道十二星座のような等間隔ではなく、それぞれの星宿間隔がバラバラの角度を保っているのである。これが不思議さの二番目であろう。二十八宿星座は後世における利用範囲が広く仏教、儒教、道教等の中で活用されたものと純粋な天文学としての二十八宿とでは、その内容を異にする処が生じて来るのである。

ここでみなさん方は十二星座と二十八宿星座の違いを根底において先へ進まれた方がより理解度が増すであろう。

黄道十二星座がなぜ等間隔の区分であったかと云うと時間の分類だったからである。

時間分類は全て等間隔でなければ用をなさない。なぜならば今日の2時間と明日の2時間が違っていては時間の役割は果せないからである。

又今日の十二時が太陽の南中の時で昨日の十二時が日の出の時であったとしたら、暦術は人間の社

会生活を乱す事ははなはだしいものがある。
その為に黄道十二星座を初め天の十二次、西洋の十二宮、東洋の十二支等時間を分類したものは、全て等間隔の区分が成されているのである。十二支であれ十二星座であれ1区分30度と定められている事は、人間社会の約束事でもある。
ところが二十八宿星座の区分は時間の分類ではない。時間の区分は十二星座の成立によって充分に満され、それ以上の時間区分は必要ないのである。
それでは何を分類したのかと云うと空間の分類の為になされた一つの技法だったのである。空間の分類は十干の成立（第一巻五行の成立の項参照）の段階で形成されたはずであるが、十干の分類は五行の分類と共に宇宙の広大な空間エネルギーの分類だったのである。
しかし空間の世界には時間と常に融合し、時間と一体となっている空間も存在しているのである。
例えば草木の芽ばえや流氷等のように、季節という時間が芽ばえや流氷の流れをつつみ込んでいる場合がある。花が咲いたり氷が流れたりする事は空間現象の一つであるが、これらの空間現象は時間をのぞいては存在しない空間である。
しかし十干五行の空間はまったく時間に左右されない世界であり独立した空間なのである。もちろん時間との融合も可能であり分離も可能なのである。
そこで空間を二つに大別して時間と関係なく存続出来る空間を「真空間」と名付け、時間と一体となっている空間を「地時空間」と云うのである。
地球上に生存している人間が肌で感じ取る事が出来る空間は、ほとんどが地時空間である。
人類が真空間を感じ取る事が出来るとすれば宇宙へ旅立ち太陽系外に行ったり、死後の世界へ入ったりする時が最も感じる時であろう。
日常生活の中では就寝中に夢をみるという状態で真空間の世界へ入る事が出来る。
しかし地球上に存在する空気（大気）や地球の引力や磁気等は全て時間とは関係のない真空間現象であり、寒さや暑さや地上の昼夜等は常に時間と空間の融合体であり地時空間現象なのである。
この地時空間を分類する為に用いられたのが空間分類から生まれた二十八宿星座だったのである。
時代を二十世紀の今日に置きかえて、現代の人間がどのような地時空間分類技法を所有しているかを考えてみよう。
まず地上にあっては子午線をもち北半球に北緯を、南半球に南緯をとそれぞれに緯度を作り出している。
それをそのまま宇宙の真空間の世界まで伸ばして赤経赤緯も作り出したのである。
現代人はこれによって自分が位置している場所を知り、太陽や月や五惑星の位置も正確に判断出来るのである。
現代人は真空間も地時空間も全て包み込んだ処の分類技法をもっている。又これだけに止まらず物理学や医学等においても種々の地時空間分類技法が考案されている。
しかし算命学成立当初にあっては子午線もなければ緯度もない。それでも人々は北へ南へ旅立ち冒険の連続であった。シルクロードを発見し不完全といえども地図を作り、自分達が位置している世界を明瞭なものにしようと努力に努力を重ねたのである。
古代人にとって二十八宿星座の成立は一種の子午線であり緯度であった。
例えば昴宿の中心は昴星（スバル）そのものであるが、北極星から昴星を通る空間の直線は地平線に達する処までが昴宿なのである。縦も横もである。後世に

なって昴星そのものが昴宿のような誤解を招いているが星と宿とは違うのである。
天頂から地平線や水平線に達する宇宙空間に画した直線と直線の間が宿なのである。
この直線が現代人の子午線の役目も赤経赤緯の役目もかねていたのである。
つまり一本の線が地上でも使用出来たわけである（図参照）。図 1.
天上にみえる二十八宿の星々を計りながら砂漠を越え雪原を旅したのである。これも又五行十干と同じように古代人が考え出した智恵である。
現代にあっては科学の進歩によって二十八宿星座を必要とする世界はなくなってしまった。しかし時間と空間の分類から成り立っている算命学の世界には絶対に必要な技法部分なのである。
二十八宿星座は地時空間分類であり、時間の分類ではない。それは同時に一朔望月の二九日余りと云う時間にしばられる事もないわけである。空間を分けるのであるから古代人は日数よりも月の恒星月を重んじたのである。（恒星に対する回転周期）
月の恒星月は 27.32 日である為に天空を二十八区分にしたのである。
月が一日ごとにほぼ一つの区分に入り通過して行くという意味から旅人になぞらへて一区分を宿と名付けたのである。
宿には「距星」と云う一番明るい星が西側にあり次の「距星」（東側）までを一つの宿と定めたのである。星はけっして等間隔に点在しているのではない。それぞれがバラバラに点在している。その為に一つの宿から次の宿までの距離は一定していないのである。（7頁の図）
古代人は「心宿東に熒惑星（火星）回座」等の表現で二十八宿星座を活用したのである。

二十八宿星座には現代の我々にも親しみやすい星が多く、参宿のオリオンの三ツ星や昴宿のプレヤーデス等がある。
二十八宿を黄道付近の星と合せてみると下のようになっている。

角宿　乙女座の中央スピーカーのあたり
亢宿　乙女座の東部
氐宿　天秤座の中央部
房宿　サソリ座の頭部
心宿　サソリ座の中心部〔大火（アンタレス）付近〕
尾宿　サソリ座の尾部
箕宿　射手座の西部
斗宿　射手座の中央部
牛宿　山羊座の西部
女宿　水瓶座の西部
虚宿　水瓶座と小馬座の一部
危宿　水瓶座中央とペガサス西南部
室宿　魚座西端北ペガサスの一部
壁宿　ペガサスの一部
奎宿　アンドロメダの中
婁宿　牡羊座西部
胃宿　牡羊座北部
昴宿　牡牛座、プレヤーデス付近
畢宿　牡牛座中央、アルデバラン付近
觜宿　牡牛座の東端から南
参宿　オリオン星座
井宿　双子座
鬼宿　カニ座
柳宿　海蛇座の中
星宿　海蛇座の中
張宿　海蛇座の中
翼宿　海蛇座とコップ座の一部
軫宿　カラス座（烏座）

二十八宿の距星(標準星)

宿名	距星	宿名	距星
角	おとめ座 α スピーカ	奎	アンドロメダ座 ζ
亢	おとめ座 κ	婁	おひつじ座 β
氐	てんびん座 α	胃	おひつじ座 35
房	さそり座 π	昴	おうし座 η
心	さそり座 σ	畢	おうし座 ε
尾	さそり座 μ'	觜	オリオン座 φ'
箕	いて座 γ	参	オリオン座 δ
斗	いて座 φ	井	ふたご座 μ
牛	やぎ座 β	鬼	かに座 θ
女	みづがめ座 ε	柳	うみへび座 δ
虚	みづがめ座 β	星	うみへび座 α
危	みづがめ座 α	張	うみへび座 υ
室	ペガスス座 α	翼	コップ座 α
壁	ペガスス座 γ	軫	からす座 γ

ギリシャ文字

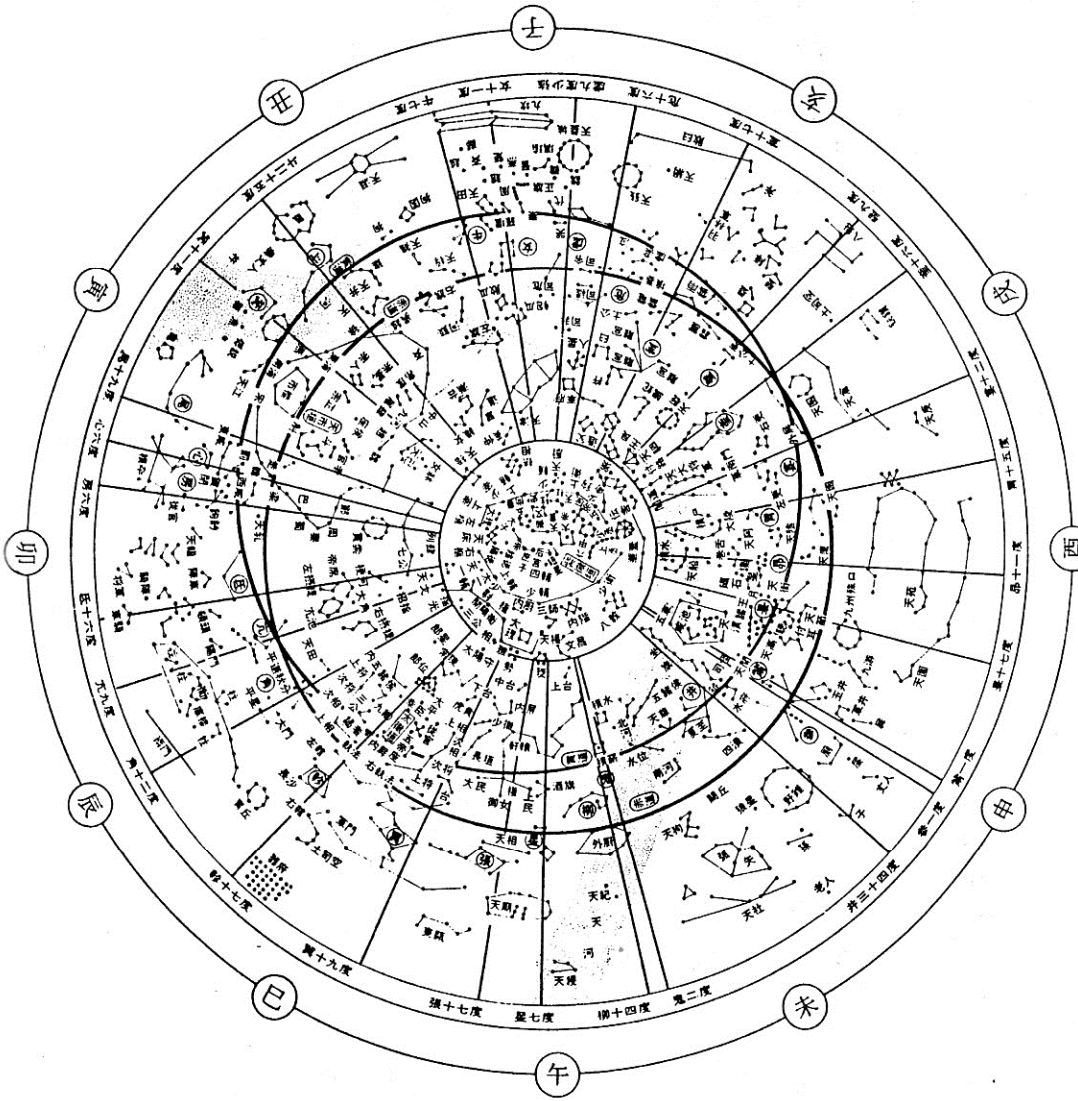
α	alpha	アルファ	ι	iota	アイオタ	ρ	rho	ロー
β	beta	ベータ	κ	kappa	カッパ	σ	sigma	シグマ
γ	gamma	ガンマ	λ	lambda	ラムダ	τ	tau	タウ
δ	delta	デルタ	μ	mu	ミュー	υ	upsilon	ウプシロン
ε	epsilon	エプシーロン	ν	nu	ニュー	ϕ	phi	ファイ
ζ	zeta	ゼータ	ξ	xi	グザイ	χ	chi	チアイ
η	eta	エータ	o	omicron	オミクロン	ψ	psi	プサイ
θ	theta	セータ	π	pi	パイ	ω	omega	オメガ

(註) 1. 二十八宿はそれぞれの広度表示がされていて、この為二十八宿それぞれに距星が考えられた。それには各々の宿の西端にある、比較的明るい星が用いられた。

2. 角宿十二度とは、角宿の距星、おとめ座の α 星から、その東隣りにある亢宿の距星までの赤経差である。

3. 但し現在の星とでは歳差の為に違いが出ている。

中国古代の星図



蘇州天文図による中国古代の星図

蘇州に現存する名高い石刻天文図は、黄裳の作で、高さ2.5メートル余り、その上半に一四四〇星を示す北極中心の星図が刻されている。原図はほぼ宋代の実際観測の結果によっている。淳祐7年（1247）建設。本図はこれに基づいて画いたものである。

（平凡社発行中国古典文学大系史記上の天官書より）

天に於ける二十八宿と十二次・十二支の図

（註） この図を星図と同じ様に頭上にかざして玄枵（子）が北の方向になる様にして見れば方向は正しく見える。但し机上にて玄枵（子）を北とすると東西は反対となる。従って天の図を机上にて天と同じ様に書くと、全て逆となり十二支十二次は反時計廻りとなる。之が天と地の逆の原理である。（上図参照）

地上に下した場合の二十八宿と十二次・十二支の図

（註） 上図の天に於ける図を地上に投影した図であって、十二次十二支は時計廻りとなる。上図を対称して見ると天の廻り方と地上に於ける廻り方が反対であるのが判る。

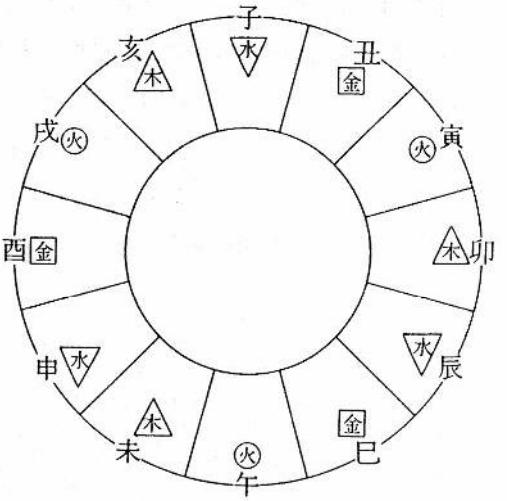
二十八宿星座は子午線や赤経の役目を果す一方暦術においても活用され、太陽と月それに五惑星を加えて七曜を作り、さらに方向を付して七星期なるものを作り出したのである。
七星期は下の通りである。

	木	金	土	日	月	火	水
東	角	亢	氐	房	心	尾	箕
北	斗	牛	女	虚	危	室	壁
西	奎	婁	胃	昴	畢	觜	参
南	井	鬼	柳	星	張	翼	軫

古代中国では日曜日の事を星期とよび、月曜日が星期一、火曜日が星期二である。
この七曜が作られるまでには二十八宿星座の四方分離が行なわれており、東西南北の四方向に七宿ずつをあてはめて方向と二十八宿を結び付けたのである。
それが基本になって七宿が七曜と直結したのである。現代人は月曜日を週の始めとしているが、古代の東洋では木曜日が週の始めになっている。これは常に木星（歳星）が中心になって暦術が作り出されたからであろう（図参照）。
二十八宿星座は天空上の目盛りとして考案されたものであるが、これを基にして時間と一体となっている地時空間を分類して行くのである。
地時空間内容の一つは十二支と云う時間に五行の空間が含まれていて、それはすでに十二次十二位十二支の成立にともない二十四節気等との結び付きによって作り出されている。
ここで時間分類である十二支の地時空間をもう一度明らかにしておく必要がある。

寅と卯は五行中の木性（甲、乙）が含まれ東方空間を所有しているが、巳と午は火性（丙、丁）であり南方空間である。
申酉は西方金性（庚辛）であり子亥は北方水性（壬、癸）であった。
丑未辰戌の四季は土性（戊、己）であり中央に位置して各季節の総まとめをつとめる。
このように十二支の各々にはすでに空間が付されているのである（図参照）。

三合会局による動空間分布図



しかし十二支における地時空間はけっしてこれだけではない。
なぜならば地時空間は時間と共に動いているからである。東方（春）寅卯の範囲に木性（空間）が存在するとしても夏にも冬にも存在しているのであり、一番そのエネルギーが旺盛になる処が東方寅卯の範囲であると考えられるのである。五行は空間エネルギーであるが地時空間の世界において

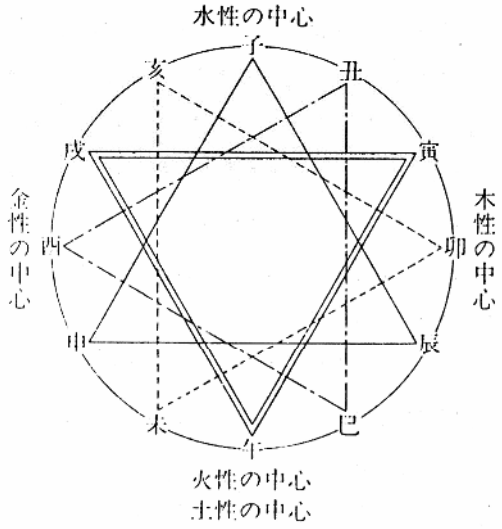
は五行全体が時間と共に移動していて、時間の推移にともないエネルギー自体に強弱が生まれる事は地時空間の特色なのである。

旺相休囚死説の項で学んだように火性は夏において旺地を得ているが、他の季節が来たからといって地上から消えるわけではない。囚死の弱い地を得ながらも晩秋であれ冬であれ生き続け存在しているのである。

このような考え方が動く空間をとらえようとしたのであるが、あまりにも多岐にわたり複雑になるので算命学を形成した当時の人達は動空間（地時空間は即ち動空間である）をとらえる方法として位相学と云う技法理論を作り出したのである。

位相学理論は動空間（地時空間）における結合理論と破壊理論から構成されているが、二十八元法に使用されている技法は結合理論の中の三合会局法だけである。

三合会局の図



位相学は項を別にして解説するがここでは三合会局法を簡単に説明しておこう。

三合会局は種々のエネルギーが存在している地時空間内の旺相休囚死の盛衰に着目したものである。

旺相休囚死説はそれぞれの五行空間が時間によって強弱を作るという説であるが、その説論をもう一歩深めて行くと旺という一番強いエネルギーは人間の目によく写りみつけやすい状態である。

しかし旺なる状態はけっして一人立ちが出来ない状況下に存在している事が解るのである。これは何も旺だけではなく相休囚死においてもいえる事である。

つまり旺と云う状態はそれを支えている状態が存在して始めて旺といえるのである。

休もなく死もない状態の中で突然に旺だけが浮び上る訳はないはずである。

人間に例えるならば、生もなく死ぬ事もなく未来永劫生存出来るとしたら壮年期であるとか老年期である等と論じられるわけはないであろう。

一木の樹木にしても旺地が来て花が咲いたとしても芽ばえる時枯れる時があって始めて旺地であり、花が咲く状態は芽ばえの時や枯れる時に支えられているともいえるのである。

換言すれば真空間は独立空間であり時間に関係なく存在出来るものである。

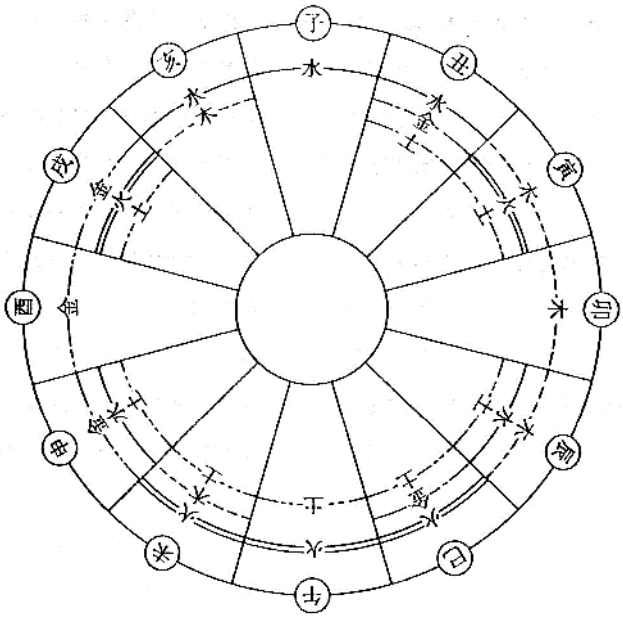
それに対し地時空間は連結空間である。けっして単独で存在しているのではなく常にその裏側で他の地時空間と手をむすんでいるのである。

はたしてどの地時空間がどの地時空間と連結しているのであろう。これを見つけ出してくれたのが三合会局理論だったのである。

そこで十二支が所有している空間五行とは別に旺相休囚死説を根底にして旺地を支えているポイントをさがす作業が始められたのである。

どのようにしてさがしたかと云うと、前項で出来上っている十二大従星を使用したのである。これを基にして旺地に対する処の出発点と終点をさがし出したのである。
始めと終りがそろってこそ旺地の範囲がはっきりするはずである。
天将星を人間の旺地とするならばその出発点は天貴星の入魂の場所にあり、終点は墓に入る天庫星に存在するのである。
みなさん方は人間の出発を出生の時(天印星)に、終りはあの世である天馳星に取ってもよいのではないかと云う疑問を生じられるであろう。そこには時間論が現わしているように人間のエネルギー(魂と解釈されてよい)に時間がない。肉体をあたえられる事によって時間が生じる。もし肉体をぬきにしたエネルギーが存在すれば無限の空間をさまようだけである。天報星の胎児、天印星の赤子を通り越してエネルギー(魂)が完全に入る天貴星をもって天将星を支える出発点とするのである。時間論はさらにつけ加えて「人間の魂は最大の空間であり肉体は最大の時間である」と云っている。つまりは有意識世界から始まり無意識世界に終るのである。
又終点を天庫星にしているのは、天馳星はこの世の星ではなくすでに他界後の世界である。
「終る」とはこの世の終りなのであって天馳星は来世への出発なのである。終り即出発ではない。出発の世界は出発であり終りの世界は終りなのである。
旺地という地時空間現象は常に始めと終りに支えられている事が地時空間即連結空間であると云う証明が出来たのである。
木性(甲)の天将星は「卯」にあり、その出発点は天貴星「亥」である。終点は天庫星の「未」に存在しているのである。
この三点を結んでみると一周円の中に正三角形が出来上るのである。
木性の旺地(天将星)を頂点として出来上った三角形は木性になぞらえて三合木局と云う。
火性は寅午戌をもって三合火局、金性は巳酉丑をもって三合金局、水性は申子辰をもって三合水局と云う。
地時空間には五行全てが連結しているのであるが三合法の技術によってそのポイントとなるところをピックアップしたのである。
この方法は旺地に存在している所が、出発点と終点であるという証明でもある。
同時に出発点と終点に同一空間が存在しなければ旺地の存在もあり得ないのである。
その結果として出来上った地時空間の分布図が下のように構成されるのである。
地時空間は常に時間と一体である為に時間と空間を引き離すわけには行かないのである。
もし時間から離したらそれはすでに地時空間ではあり得なくなるのである。
しかし一つの時間範囲の中に幾種類もの空間が重なって存在しているのであるから、立体から平面に置きかえなければならないのである。立体では一つの空間の下にさらに空間が存在するのであるから平面ではみえないのである。又時間そのものは常に平面である。さらに算命学には単独時間範囲の中に種々の空間が存在している状態を整理整頓する技術がどうしても必要だったのである。
算命学は空間(真空間)を分類して十大主星を作り、時間を分類して十二大従星を作り出した。
しかし人間そのものは時間と空間の融合体の中で人生の旅を続けているのである。

動空間分布図



人間は時間の中でも生きているが空間の中にも生きているのである。

もっと大切なのは時間と空間の接点にこそ人間の運命の謎が存在しているのではないかと考えたのである。

それを解決する為には時間と空間が一つになっている地時空間の世界に挑戦しなければならなかったのである。

その結果として構成された地時空間の分布内容は時間と切り離すわけには行かないのであるから、新しい空間区分をもって整理しなければならなくなったのである。時間と時間は重ならないので時間による地時空間分類は不可能である。

そこで活用された区分法が二十八宿星座による区分法だったのである。

現代人が広い海原の一部をみつけ出し大衆に知らしめる為に子午線と緯度を使用する方法と何ら変るところはないのである。

二十八宿星座を利用して地上の地時空間を分類整頓する方法は、天上の各宿をそのまま地上に降下させ地時空間分布図の上に重ねてみる事だったのである。

十二支を作り出す為に天の十二次を地上におろした方法と何ら変る処はない。

この方法によって十二支と十二次と二十八宿星座が一体となり新しい空間分類が出来るわけである。

しかし二十八宿はあらかじめ東西南北の四方向に七星宿ずつあてはめられている為に、かならずしも季節の方向九〇度とはかぎらない。だが一つの円周を一周する事においては一致しているのである。

太陽も月も五惑星も全て一つの道すじを通過しているのであるから、当然星々にしてみれば十二次も十二支も二十八宿星座も十二宮も同時に通過しているのである。

そこで季節の支配者である太陽が二十八宿の各宿を何日間で通過するかをしらべたのである。
その日数と二十四節気や十二支とを合せてみれば季節（空間）の移り変りを平面に置きかえる事が出来るのである。太陽の運行は即時間である時間は平面であるから、果しのない空間（立体）を平面によって分類し置きかえれば空間を横一列にならべる事が出来るのである。
しかし平面といっても人間の目でみえる表面が平面なのであって、その裏側には当然立体が存在しているのである。

この分類方法を二十八元法と云う。
算命学成立当初の二十八元法は1年365日余りを一円周に等間隔で配し、それを二十八宿で区切りしかる後に十二支と結合させたのである。（現在使用されているものではない）
その結果古代の二十八元表において寅月二月は7日間〜10日間程まで太陽が斗宿へ動く。そこで箕宿8日余り、尾宿は次の節明けまでとしたのである。
さらに寅と云う時間範囲には木性と火性の空間が存在し、斗宿は丑と寅の二ケ所にまたがっている。

十二次・二十八宿・二十四節気の関係

	実沈			大梁			降婁			娵訾			玄枵			星紀		十二次
終於井	中井	初畢	終於畢	中昴	初胃	終於胃	中婁	初奎	終於奎	中営室	初危	終於危	中危	初婺女	終於婺女	中牽牛	初斗	二十八宿
十五度	初度	十二度	十一度	八度	七度	六度	四度	五度	四度	十四度	十六度	十三度	初度	八度	七度	初度	十二度	
	小満	立夏		清明	穀雨		春分	雨水		啓蟄	立春		大寒	小寒		冬至	大雪	二十四節気
	析木			大火			寿星			鶉尾			鶉火			鶉首		十二次
終於斗	中箕	初尾	終於尾	中房	初氐	終於氐	中角	初軫	終於軫	中翼	初張	終於張	中張	初柳	終於柳	中井	初井	二十八宿
十一度	七度	十度	九度	五度	五度	四度	十度	十二度	十一度	十五度	十八度	十七度	三度	九度	八度	三十一度	十六度	
	小雪	立冬		霜降	寒露		秋分	白露		処暑	立秋		大暑	小暑		夏至	芒種	二十四節気

註 1. 方鑑図とは逆の廻りになっているが、之は天と地では廻り方が逆になっている為である。これに関しては図2及び図3を参照せられたい。
2. 二十八宿名の婺女は女宿、牽牛は牛宿、営室は室宿の事を云う。
3. 後世の暦と比較すると二十四節気の啓蟄は雨水と、穀雨清明と、それぞれ入れ替る。

その為に丑の土性がある程度入り込んでもいると考え、寅の時間範囲は初め土性、中間には火性、終りには木性が存在しているという区分を作り出したのである。

その日数は各宿に滞在している太陽の通過日数だったのである。

通過日数は全て三統暦にたよっているが算命学にとって三統暦は一種のバイブルである。

三統暦とは古代中国において成帝の頃に作り出された太陰暦の一つである。

撰定したのは劉歆であるが紀元前七年の事である。

三統暦は235太陰月を19年と定め「章」と云う。

1年を $365\frac{365}{1539}$ 日とし、1ケ月を $29\frac{43}{81}$ 日としている。 235ケ月をもって19年と定める方法は十九年七閏法の事である。三統暦における月の大小閏月は一ケ年の日数の端数分母が示す通り1539年で循環するのである。

これを一統と云う。これを三つ合せて三統を作れば一元と称し4617年になる。

この平数をもって年月日の十干十二支が全て循環する仕組になっているのである。ゆえに三統暦というのである。

一章＝19年＝ $6939\frac{61}{81}$ 日

一統＝81章＝1539ケ年

一元＝3統＝4617ケ年

三統暦によって二十四節気と二十八宿が一つのものに作り上げられたのであるが、太陽が二十八宿を通過する状態と地上の二十四節気の状態が一つになった表は下の通りである（三統暦による）。

この方法が基本になって二十八元表式が作り出されたのであるが、これは使用する上で他の理論と融合しにくい一面が現われて来たのである。しかしこの方法は長い歳月に渡って使用され、少なくとも成立後千年近く活用された形跡が残っている。

その為に三統暦による二十八元法は何度も改良され工夫されたのであるが、原形に残っている欠点は十二支が本来もっている空間と地時空間のバランスがとれない事である。

ゆえに欠点をさらにおぎなう方法として時間に重点を置き、二十八宿の空間を人為的に調整して行く方法を考えたのである。

原形のままで行くと太陽の通過法則にとらわれて地時空間の存在がおろそかになりやすいのである。そこで太陽の観測基点となる四正に着目し、地時空間の中心的存在として別格あつかいをしたのである。

四正とは春分点、夏至点、秋分点、冬至点の四点である。

この四点は三合会局法の中心であり、地時空間内に存在している五行の旺地でもある。亥卯未の三合木局は卯（春分点）が中心になり、巳酉丑の三合金局は酉（秋分点）が中心である。寅午戌の三合火局は午の夏至点が中心であり申子辰の三合水局は子の冬至点が中心になっている。

ここに第一重点を置き、第二には十二支が本来所有している五行に重きを置いたのである。

この方法は子卯午酉の四点を専気と称し、他の地時空間が存在しても力を発揮する事は出来ないと考えたのである。

その為に二十八宿星座による区分があっても同じ空間が連結されている場所として取りあつかったのである。

しかし午の場所はどうしても2区分しなければならない。なぜならば三合会局法は五行中四種類であり土性の中心となるべき場所がないのである。土性の空間はそれなりに存在しているのであるからやはり中心を作らなければならない。その為に火性は土性を生じるところでもあるから、午の場所は土性と火性二つの中心を受けもっているわけである（現在の二十八元表参照）。

しかし区分された日数はやはり原型と同じく二十八宿を太陽が通過に要する日数である。

このような原理の下に二十八元表式は作成されたのである。

現在使用されている二十八元法式はこの他にも種々な約束事が介在しているのであるが、その作成方法は複雑になるので後の巻で解説して行く事とする。

古代中国における二十八宿は三統暦成立以前にすでに形作られていたのであるが、我が国日本においては天平年間、唐の僧鑑真によってもたらされたと云う。三統暦成立より1420年後の事である。

二十八元表の原型

支	初空間	中空間	本空間
子	壬8度	癸1度	癸15度
丑	癸12度	辛1度	己7度
寅	戊10度	丙7度	甲11度
卯	甲5度	乙5度	乙9度
辰	乙12度	癸10度	戊4度
巳	戊18度	庚15度	丙11度
午	丙9度	己3度	丁17度
未	丁16度	乙31度	己8度
申	戊12度	壬1度	庚15度
酉	庚7度	辛8度	辛11度
戌	辛5度	丁4度	戊6度
亥	己16度	甲14度	壬4度

①この表は文献に基いて荘学院にて作成した。
②1度は0.99日として換算する。
③これは原型であって現在使用されてはいない。
④原型は日数でなく度数で表わしている。

二十八元表

支	初元	中元	本元
子			癸節明
丑	癸9日	辛3日	己節明
寅	戊7日	丙7日	甲節明
卯			乙節明
辰	乙9日	癸3日	戊節明
巳	戊5日	庚9日	丙節明
午		己19日	丁節明
未	丁9日	乙3日	己節明
申	戊10日	壬3日	庚節明
酉			辛節明
戌	辛9日	丁3日	戊節明
亥	甲12日		壬節明

※実際の鑑定には、この28元表を使用する。